

社会科 提案授業実践報告

1. 学年と単元・題材 第2学年「中国・四国地方～町おこし・村おこしプロジェクト～」

2. 単元・題材について

本報告では、中学校学習指導要領地理的分野の内容C(3)日本の諸地域「中国・四国地方」の実践を提案する。中国・四国地方は工業地域が分布する瀬戸内海沿岸には、都市が点在し人口が集中している。一方で、南四国や山陰地方では、人口の減少と高齢化が進行し続ける過疎化が大きな課題となっている。しかし過疎地域の中には、様々な課題を克服しようと、観光開発に力を入れたり新たな特産品の生産・販売に力を入れたりするなど、地域の特性をいかした町おこし・村おこしに取り組んでいるところもある。

人口が都市部に集中し過密化が進む一方で、地方では人口の流出が進み、過疎化が課題となっている事例は全国各地でみられる現象である。過密地域での生活が日常となっている本校の生徒たちにとって想像しがたい状況であるが、人口減少、少子高齢化の問題は将来必ずや自分たちの生活に大きな影響を及ぼす。どこか遠い地域の問題ではなく、自分事として切実性を持って取り組むべき問題であることを認識させることに主眼を置いて中国・四国地方の学習に臨ませたいと考えて本授業プランを考えた。

本単元の学習内容を、人口や都市・村落を中核とした考察とし、「過疎地域ではどのように地域づくりを進めていけばよいのだろうか」という学習課題を設定した。人々の生活・文化や産業などに関する事象と関連付け、人口や都市・村落が地域の人々生活・文化や産業などと深い関わりがあることを学び、その上で、他地域の事象やそこで生ずる課題を関連付けて多面的・多角的に考察させる。そして、その考察に基づいて各自で中国・四国地方から一つずつ自治体を選び、過疎地域を活性化するための町おこし・村おこしプランを考案し提案することを最終目的とした。

東京に住む中学生にとって、中国・四国地方は最も縁遠い地域である。単元の最初に中国・四国地方に行ったことがあるか生徒たちに尋ねたところ、ほぼ全員が訪れたことが無いことが分かった。前提となる知識や経験が少ない中、本校生徒が現地では深刻な過疎化の問題について、切実性を持って考えることは難しいと考え、約3か月半の長期的な学習計画を立てて取り組ませることとした。前半の4時間では人口や都市・村落を中核として、中国・四国地方の地域的特色や物資や人々の移動の特色や変化、それに伴う地域の変容について学習した。後半の4時間は日本の諸地域学習の中の他地域の学習と並行しながら、2週間に1回程度の割合でプロジェクトを進めた。授業と授業との「間」を設けることにより、生徒たちに調べ直し・考え直しの必要性を生み出し、次の授業までに「自分なりに動いてみたい」という、追究への意欲を生み出すことができた。さらに追究の意欲を盛り立てる環境設定として、地域活性化を研究する大学の専門家、お茶の水女子大学教授、同附属学校の社会科系教科の教員にも加わっていただきながら、評価の視点を明示した上で生徒一人一人が考えた町・村おこしプランをコンテスト形式で競わせる形式をとることとした。

3. 単元の目標／評価規準

(1) 本単元の目標

・中国・四国地方の人口の偏在や持続可能な地域づくりに向けた取組と、それに関する特色ある自然環境、産業の様子や、そこで生ずる課題やそれに対する地域づくりの取り組みを理解している。（知識・技能）

・中国・四国地方における「過疎地域における町おこし・村おこし」という課題に基づき、地域同士の結び付きや人々の地域への関わりに着目して、特色ある自然環境や産業の様子、そこで人口の偏在や地域づくりに向けた取り組みに関連付けて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。（思考・判断・表現）

・中国・四国地方における「町おこし・村おこしプロジェクト」への取り組みを通して、中国・四国地方の地域的特色に対する関心を高め、地域の課題について主体的に追究しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

(2) 本単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①人口や都市・村落を中核とした考察で取り上げた人口の偏在や持続可能な地域づくりに向けた取組と、それに関する特色ある自然環境、産業の様子や、そこで生ずる課題やそれに対する地域づくりの取り組みを理解している。</p> <p>②地域的特色や地域の課題に関する様々な資料を収集・選択して図表などにまとめたり、発表の方法を理解し、その知識を身に付けたりしている。</p>	<p>・中国・四国地方における「過疎地域における町おこし・村おこし」という課題に基づき、地域同士の結び付きや人々の地域への関わりに着目して、特色ある自然環境や産業の様子、そこで人口の偏在や地域づくりに向けた取り組みに関連付けて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。</p>	<p>・中国・四国地方における「町おこし・村おこしプロジェクト」への取り組みを通して、中国・四国地方の地域的特色に対する関心を高め、地域の課題について主体的に追究しようとしている。</p>

4. 指導と評価の計画（単元・題材）

●＝学習改善につなげる評価 ○＝評定に用いる評価

時間	ねらい・学習活動	評価			備考 ★振り返りに関する活動
		知識	思考	態度	
1	地図や統計資料を使って中国・四国地方の自然環境や地域的特色を捉える	●			ワークシートの記述

2	中国・四国地方の自然環境と人口分布を結び付けて考察する		●		ワークシートの記述 ノートの記述
3	中国・四国地方の人口の偏在の理由とその影響について考察する		●		ワークシートの記述 ノートの記述
4	中国・四国地方の地域的特色や地域の課題を捉える	●			ワークシートの記述 ノートの記述
5	中国・四国地方の町・村おこしワークシートを完成させる（冬季課題）			○	ワークシートの記述
6 本時	中国・四国地方の町・村おこしプロジェクトの中間発表、スライド作成	○		○	ワークシートの記述
7	専門家による講評、町・村おこしプロジェクト提案用スライド作成			●	スライドの記述
8	中国・四国地方の町・村おこしスライドクラス内評価・投票		●	○	スライドの記述 他者への評価コメントの記述

5. 本時の学習

(1) 本時（第6時）の目標

各自で考えた町・村おこしプランについて発表し、またその内容についての相互評価をもとに、提案内容を一枚のスライドにまとめる活動を行う。

(2) 指導と評価の流れ

	主な学習活動と内容	指導上の工夫・配慮、評価（◆）
課題設定	冬休みの課題としていた「町・村おこしプラン」ワークシートをもとに、小グループで発表する。	どのような点に着目するか、着眼点を示した上で発表・相互評価を行わせる。
課題追究	小グループ内で相互に評価コメントを伝え合う活動を通して、自分のプランを再度見直す。ワークシートの内容を1枚のスライドで表すことができるよう内容を精選し、提案内容を磨き上げる。	「大学生まちづくりコンテスト」の作品を例示しながら、スライド1枚で示すための工夫や、提案のまとめ方、課題の分析方法について示す。
省察	相互評価をもとに自分のプランを再度見直し、提案スライド作りに活かす。	作業の流れをスライド、ワークシートにまとめ、電子媒体で生徒に送り、いつでも活動内容を振り返ることができるような学習環境を整える。

(3) 評価規準

【知識・技能】

- ・人口の偏在や持続可能な地域づくりに向けた取組と、それに関する特色ある自然環境、産業の様子や、そこで生ずる課題やそれに対する地域づくりの取り組みを理解できる。
- ・地域的特色や地域の課題に関する様々な資料を収集・選択して図表などにまとめたり、発表の方法を理解し、その知識を身に付けることができる。

【思考力・判断力・表現力等】

中国・四国地方における「過疎地域における町おこし・村おこし」という課題に基づき、地域同士の結びつきや人々の地域への関わりに着目して、特色ある自然環境や産業の様子、そこで人口の偏在や地域づくりに向けた取り組みに関連付けて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できる。

【主体的に学習に取り組む態度】

中国・四国地方における「町おこし・村おこしプロジェクト」への取り組みを通して、中国・四国地方の地域的特色に対する関心を高め、地域の課題について主体的に追究することができる。

6. 生徒の学習の実際

コンテスト形式にすること、専門家のアドバイスを得られること、さらに自分で自治体を選択できることなどにより、中国・四国地方に馴染みのない生徒がほとんどであったにもかかわらず、かなり綿密に下調べを行い、真剣にプラン作りに取り組む姿が見られた。また、スライド作りの準備として、ワークシートに下調べをさせて臨ませたことにより、どの生徒も各自自治体の課題把握・分析、そしてその課題を解決するための提案まで進めた段階で、その内容について振り返る機会を持つことが出来た。さらに、プロジェクト期間を長く確保したことにより、時間に追われることなく、探究と省察の過程を少しずつ積み重ねながら、自分のペースで完成まで漕ぎつけることができた。

7. 生徒の学習の考察

生徒の探究の姿勢がより高まったのは、中間発表にて相互に意見を交換した後と、オンラインでない大学の専門家から具体的なアドバイスをいただいた後である。特に専門家の立場から、需要やコスト、利害関係者の面など、実現可能性や持続可能性の視点に立つことの大切さを学んだことにより、自分たちのプランの課題にきちんと目を向けることができた。多くの生徒から自分のプランを見直し、より高めていこうとする姿が顕著に見られた。例えば、授業者は当初「過疎地域に人を引き付ける」視点に留まったプラン作りを想定していたが、生徒から「観光客を呼び込むのか、定住者を増やすのか」とよりステークホルダーに絞った質問がなされるなど、明らかに専門家のアドバイス以降、より深く考察する姿が見られた。また、他者のプラン内容に刺激を受け、「もっと提案内容を練り直したい」と述べたり、後日もう一度アドバイス動画を見直したいと申し出たりする生徒の姿が見られた。これらも振り返りと探究が積み重ねられた学びの成果である。

8. 成果と課題

今回、約3か月半のプロジェクト型の学習を設定したことは、大いに効果があったと捉えている。もちろん、8時間の単元計画を連続で実践することは可能であるが、授業と授業の「間」を設け、振り返りの機会を保障することで、生徒たちの中に問い直し・考え直しの必要性が生み出された。それが追究への意欲を高め、自ら主体的に自分の考えに関わる知識を定着させ、考察を深める原動力となったと考える。最終時に行ったクラス内投票では、ロイロノートを使って選出理由を記入したカードを付けて、一人あたり3作品を選ぶよう指示し、ボルダ・ルールを採用し順位ごとに点数化して合計を出した。選出理由には地域の独自性やコスト面も含めた持続可能性、テレワークやインスタグラムなど時代の課題や要請に対応した新規性に着目した記述が多く見られた。単に見栄えではなく、各プランの内容面から考察する姿が見られたのは、一人ひとりが評価の観点に即してプラン作りを進めてきた証左であろう。最終的には大学の専門家に優秀プランを選出してもらい、遠隔で講評もいただけた。また、並行してお茶の水女子大学、附属小、附属中の先生方から選んでいただいた結果、選出されたプランの重なりが少なく、多くの生徒が各先生方から大変高い評価を得ることができたと捉えられる。一方、実際に現地に訪問したわけではないので、効果の実証や現地の声に耳を傾ける機会は設けていない。選んだ自治体によっては得られる情報に偏りがあったのも事実である。